書架　関良基 著『日本を開国させた男、松平忠固　近代日本の礎を築いた老中』

2021 年 2 月 21 日　　虎長

はじめに：

上田藩主で、かつ老中を務め開国に貢献しながら一般の史書では忘れられた松平忠固*ただかた*(改名前は忠優*ただます*)を上田出身の農学者である著者が記した見事な歴史書である。本書は 2020 年 7 月に作品社より刊行され評判となった。週間ダイヤモンド'(佐藤優)、東洋経済でも簡単に紹介され、日本経済新聞夕刊では、縄田一男が五つ星の評価をしている。僕は、毎日新聞上の橋爪大三郎による書評の Web 上の再録に誘われて本書を読んだ。薩長による「幕府は無能」というネガティヴ・キャンペインと、今でも教科書に示された「不平等史観」の誤りへの義憤に圧倒され、それを支える冷静で説得力ある分析に感銘を受けた。

要点：

忠固は藩主として、大凶作時に武士の俸禄を削り、他藩で米麦を買い集め餓死者を出させせず、養蚕振興で品質向上を図り、上田からの生糸の輸出は一時日本からの全輸出の大半を占めるようになった。

老中としては、ペリー来航時に、忠優は開国を進めようとするが、過激な攘夷論者である水戸の徳川斉昭*なりあき*と激論となるが、日米和親条約締結にこぎつける。老中首座阿部正弘は斉昭を海防参与にしてしまう。一度決まった交易開始を阿部が覆し、交易開始論は忠優一人となり、失脚する。阿部が退き、堀田正睦*まさむつ*が老中首座となり、忠優は忠固と改名して老中に復帰、ハリスとの交渉で日米修好通商条約を結ぶ。忠固が締結を急いだのは、すでにインド・清に低い輸入関税率を押しつけたイギリスに先んじて妥当な関税率をアメリカと合意してイギリスへの先例としたかったからである。大老井伊直弼は勅許を必要と主張したが、忠固は反対した。禁裏を巻き込んだら面倒になり締結が遅れるからだ。

輸入関税率は従価 20%で、5 年後は日本からの談判次第で変えられるものとなった。不平等条約ではない。ハリスはアメリカにない輸出税は日本もつけない方がよいと助言したが日本側は 5%つけ。その替わりとしてアメリカは日本に最恵国待遇を与えないことになってしまった。日英修好通商条約では、輸入関税従量 5%、改定はイギリスも言い出すことができるようになった。不平等条約である。

薩英戦争、下関での長州による英・仏・蘭・米、四か国艦隊砲撃が原因で 5%輸入関税率を押しつけられたのだ。明治政府になってから薩長が「幕府の弱腰で不平等条約を押しつけられた」という定説を作り、これが今日の歴史教科書にまで引き継がれている。幕府は、これらの攘夷戦争の賠償金まで払わされている。清はアヘン戦争に敗れて低関税率をおしつけられた。徳川幕府は戦争をせずに国際標準の関税率を実現できたはずのところ、外交を知らぬ薩長の攘夷戦争敗戦で低関税率を飲まざるを得なくなったのである。

領事裁判権については「日本人に法を犯したアメリカ人はアメリカ領事館がアメリカ法にもとづき処罰し、アメリカ人に法を犯した日本人は日本当局が日本法にもとづき処罰する」となっている。当時、アメリカに日本領事館がなかったので、あいまいになったままだった。ロシアとの条約では双務性が明確になっているという。

感想：

僕は常々、薩長史観に反感を持っている。徳川幕府は長州よりも尊皇だったのに、薩長は岩倉具視とと

もに錦の御旗を偽造して幕府を賊軍とした。幕末の「志士」たちも攘夷から開国に考えを変えたというのが定説であるが、水戸学にもとづく「国体論」は明治政府にひきつがれ、その非合理な自民族中心主義はアジア太平洋戦争と敗戦を招くに至った。著者は終章において「過ちを繰り返さないために」「日本の未来を照らすために」忠固の記憶を蘇らせる必要があると説く。卓見である。「過ち」といえば、原田伊織著『明治維新という過ち』(毎日ワンズ)は、「吉田松陰と長州テロリストが日本を滅ぼした」と激烈に主張している。同感である。半藤一利・出口治明著『明治維新とは何だったのか　世界史から考える』(祥伝社)の主張も 言葉は激烈でないが、勝海舟の評価を除き、ほぼ同趣旨である。

日米修好通商条約は井伊直弼が勅許なしに結んだと教わったが、本書で、井伊は勅許を必要とし、松平忠固が不要とした、と初めて知った。また本書は斉昭に忖度した阿部正弘を評価していないが、『明治維新とは何だったのか　世界史から考える』では阿部を高く評価している。この点をもっと勉強してみたい。本著者が、「女性権力の必要性」で本書を締めていることが面白かった。攘夷論者で女癖の悪い斉昭を大奥が嫌い、忠固を応援し斉昭の暴走にブレーキをかけたためだ。ところが、明治以降女権は弱くなった、というのだ。忠固は安易な妥協をせず正論を通そうとするため、敵も作ったようだ。現在の日本では周りの人や雰囲気を気にしすぎて正論を通そうとしない傾向が強い。それでも「オリンピックよりコロナ対策が重要」と正論を主張した島根県知事は偉いと思う。

余談：

幕末・明治史の「通説」は精査する必要がある。日本経済新聞土曜日の「半歩遅れの読書術」は現在日本史家の磯田道史が担当しているが、アンガス・マディソン『世界経済史概観』によれば、ペリー来航前の 1820 年末、日本の GDP は米国のそれの 1.65 倍、人口は 3.1 倍、これが教科書にはない 19 世紀日本が独立を保てた原因だ、とのことだ。『明治維新という過ち』では、徳川慶喜と勝海舟が不評である。薩長に政権を渡したことが悪いということだろう。一方、三谷博著『明治維新を考える』(岩波現代文庫)では、明治維新という革命が大混乱なく達成できた一つの要因に、武士の社会的自滅があり、そのための慶喜の役割を評価している。一般に「慶喜は分からない人」との見方が多いが、もっと調べてみたい。勝海舟に関しては半藤一利による手放しの高い評価に同感であるが、もう少し他の意見も読んでまとめてみたいと思う。また、江戸から明治への連続性と言う点で、江戸時代後期の主に在野の合理的思想家たちを紹介する、苅部直著『「維新革命」への道「文明」を求めた十九世紀日本』(新潮選書)は「明治維新=文明開化」史観を覆す刺激的なものである。ハーバート・ノーマンが『日本における近代国家の成立』（岩波文庫）で、「清や朝鮮のように科挙による官僚でなく、武士が政治を担ったことが近代化を可能にした」と述べたことと並んで、近代化論の参考になると感じた。

以上